

「ハンズ・オン」をもとめて

来年1月より、ボストン子ども博物館での展示を皮切りに約5年間、全米の子ども博物館を巡回るプロジェクト「日本からの5人の友達」がスタートする。その一環として来年3月の春休みに、こども工房の子どもたちを中心に京都の子どもたちが、ボストンとニューヨークにある子ども博物館を訪問する。その下見と打ち合わせに8月末からボストンとニューヨークに飛んだ。そして、今回の旅のもう一つの目的は、世界の子ども博物館に影響を与えたといってもよい「ハンズ・オン (Hands-on)」の精神を肌で感じてくれることだった。

ボストン子ども博物館が吉祥地

今や世界中に400館から500館の子ども博物館があり、その数は年々増加している。世界で最初の子ども博物館は、今回訪れたニューヨークのブルックリン子ども博物館で1899年に誕生した。しかし、急激な数の増加は、1960年代にボストン子ども博物館において、「ハンズ・オン」という画期的な展示が実践されて以降のことである。育児書で有名なベンジャミン・スポック博士の長男で当時の館長マイケル・スポック氏が、日常身の回りにあるトースターやテレビといった器機などを半分に切り開いてその内部を見せたり、また、分解・組み立てが行える展示を試みたのがはじまりのようだった。

「自分から積極的に見て触って体験することによって、ものごとを理解する」という基本的な考え方のもとに、ガラスケースに入れられていた展示資料を外に出し、直接触られるようにしたのが「ハンズ・オン」である。そして、単に触れるということだけでなく、「よりよい体験のあり方」ということが考えられ、「五感を使った体験」といわれる現在の「ハンズ・オン展示」が発展してきたのである。

ハードではなくハート

いよいよ念願のボストン子ども博物館に足を踏み入れた。湾岸沿いにある同館は、もともと倉庫であった建物を利用している。内部は赤、青、黄、紫…といった原色の壁に、さまざまな展示物や施設があり子どもたちの笑い声が響いていた。そこで、おもしろい展示物に出会った。

例えば現在、ボストンの街中はあちこちで工事が行われているが、その工程や実際に現場で働く人の紹介をしている展示があった。子どもたちに今、現実の社会生活の中で行われていることを伝えるためのものだ。地面にささったドリル(?)に触れると上にあるスピーカーから「ドゥ・ドゥ・ドゥ…」という工事の音が鳴ったり、働く人が実際に身に着けている作業服やヘルメットも試着することができる。また音楽のコーナーでは、大きなマルチビジョンの画面に指揮棒がついており、子どもたちがその指揮棒を振ると、それに合わせて画面のオーケストラが演奏するようになっている。ラップミュージックを友達と一緒に作る装置も大人気だ。

もちろん、最近、日本でも「ハンズ・オン」の影響を受けて、取り入れている展示物もいくつか見つけることができた。そういう意味では、確かに展示物で独自のものもあるが、想像を絶するような奇想天外なものがあるわけでもない。

と違って展示物から来館者の方に目を移してみたら、ぼくが、まだ日本では見たこともないものを発見。それはなんと、親向けのサイン(指示物)。もちろん英語で書かれているため日本語のわかるスタッフに聞いたところ、「この展示はこのように遊ぶのである、こういう知識を覚えておかないといけない、といった類のことではなく、この展示物をテーマにこんなふうな質問を子どもたちにしてみたら、と子どもたちの考えるヒントとなるようなことが書かれている」と教えてくれた。

だからかもしれないが、アメリカでは、一緒にやってくる親も展示物やプログラムに参加しているケースが日本の親よりもはるかにおい気がした。日本では施設に入ったら「後は任せ」とばかりに隅の方のイスやベンチに座って居眠りしている大人の姿をよく見かける。(ぼくもしたことがあるが…)。

きっとここに「ハンズ・オン」の本当の精神(ハート)があるのではないのかと感じた。つまり、展示物(ハード)はもちろん子どもたちにとって重要である。が、しかし、それよりも重要なのは、その展示物を媒介として子どもたちが友人や親、そしてスタッフとどれだけコミュニケーションを図ることができるのか。そして、子どもたちがコミュニケーションによって得た情報や知識を自分の知恵として身体に蓄えていくこと、それが「ハンズ・オン」。さらに「ハンズ・オン」を求めてニューヨークはブルックリンへと向かった。

世界で最初にできた子どものための博物館、ブルックリン子ども博物館。マンハッタンから地下鉄で最寄の駅に着き、地上に出てみると、いきなり大パレードに遭遇。訪れた9月1日はアメリカの祝日で、レイパーデーという労働者のための祭りの日であった。異様な雰囲気の中、地元の人に聞いてもなかなか子ども博物館の場所がわからず、ヘトヘトになり最後はタクシーで運んでもらった。

住宅街の一角にある子ども博物館の入り口からは、大きなかまぼこ状の電飾トンネルとなっていた。展示場施設はその電飾トンネルから枝分かれするような配置になっていたが、正直なところ、ボストン子ども博物館のそれらと比べると、規模的にも内容的にも見劣りするよう気がした。

ただ、逆に展示や施設の規模がそれほど、大きくないこともあって、スタッフは子どもたちにとって、より身近な存在のように感じられた。ヘビの生態を観察するコーナーでは、スタッフが保存液に漬けてあったネズミの身体から布で水分を吸い取った後、ヘビに与えながら、気さくに親子連れに説明をしていた。子どもだけではなく親も何やら熱心に質問をしていた。

ブルックリンや子ども博物館の予備知識をもたないまま訪れたのだが、後から調べてみると、子ども博物館も運営的には市や州からの助成金等が出ているとのこと。そう言えば、入場料も払わず、入り口に立っていたガードマンの女性に笑顔で迎えてもらったの思い出した。

おそらく比較的貧しい地域であるブルックリンにあって、子どもたちの居場所として子ども博物館は生まれてきたのではなかろうか。展示や施設の教育的価値に重きを置くボストン、かたや子どもたちが気楽に集まれる場づくりを重視するブルックリン。同じ子ども博物館でも地域性や運営の目的によって、大きくその役割も変わってくる。

今回、訪れたアメリカの二つの子ども博物館。来春、こども工房の子どもたちを連れて再び訪れる。そこで、子どもたちに伝えたいこと。それが「ハンズ・オン」=「かわかり合うこと」。初めての海外一人旅で、アメリカでの入国審査の際、書類の不備でなかなか入国できなかったこと、ニューヨークで自分の居る位置がわからず、同じところを2、3時間もクルクル回っていたこと、ニューヨークからボストンへ帰ってきて、ホテルまでタクシーに乗ろうとしたが、近いということで乗車拒否され、夜のまちをさまよったこと…。もっとスムーズに、あらゆることに、かわかり合えると思っていたのに、実は頑固で柔軟性に欠ける自分に気付いたりもした。

子どもたちにも、このプロジェクトを通して、あらゆることに、かわかり合ってほしい。出発前の準備、家族、友人、親戚の人、飛行機に乗る時、機内の客室乗務員、ホテル、現地スタッフ、子ども博物館、自由の女神、グラウンドゼロ、ボストンのロブスター、美術館、さまざまな国の人々と。